

## ふだんの自治会活動が災害時の強みに

豊丘自治会

山路秀丘さん  
松田伯明さん

——お二人のご経歴を教えてください。

山路 元教員で、現在はボランティアで学習塾の講師を務めたり、NPO法人で



山路 秀丘さん

森林保護活動を行ったりしています。震災のあった平成30（2018）年には、豊丘自治会の自治会長を務めていました。

松田 私は農家。個人だけでなく、共同で農地を管理して作物を育てる活動も



松田 伯明さん

行っています。山路さんの前の平成29（2017）年の自治会長でした。

——豊丘地区は、どのような地域でしょうか？

山路 豊丘地区には31世帯90人ほどが暮らしています。農家が多く、家業として古くから営んでいる人もいれば、新規就農された方もおり、様々です。ふだんから、近所の農家の種まきや田植え、芋掘りなどを自然と手伝う関係です。

松田 農家として実稼働しているのは10戸ほどでしょうか。ほかに勤めに出ているり、高齢で農家を引退した方もいます。こうした中で使われなくなった農地を活用し、共同で農業を行う任意団体があり、私はそちらでも活動しています。

——地震直後の状況を教えてください。

松田 私は自宅で寝ていました。タンスが倒れる被害があったものの、家自体は一部損傷で済みました。停電になったので、夜

が明けるのを待つて近所を見に行くと、道路が大きく傷んでいて、驚きました。

山路 私も同じく自宅で就寝中でした。洋服ダンスが倒れてきましたが、ベッドに引っかけたままです。ベッドではなく、床に布団を敷いて寝ていたら、タンスの下敷きになっていたかもしれません。家の裏で土砂崩れが起こる危険性があったので、公民館である豊丘マナビイハウスに妻と二人で避難しました。その後3週間、避難生活を送りました。

——豊丘マナビイハウスの避難所の開設時はどのような状況でしたか？

山路 私と妻がマナビイハウスに着いたのは、朝5時頃と記憶しています。すでに町職員が2名、到着していました。町や消

防、自衛隊などの動きが非常に早かった印象を持っています。東日本大震災以降に国や自治体の防災体制の整備が進んだ成果として現れたのだと思います。

松田 安否確認も、豊丘地区に住む町職員がすぐに限なく回っていました。ただ、道路がめっちゃくちゃになっていたので、段差に引っかけたタイヤがパンクしたり、車体が壊れたり、相当苦労したようです。

山路 マナビイハウスで昼夜を過ごしたのは結局、私の家族だけだったんです。自宅で生活を続けている人がほとんどでした。中には、自宅前にテントを張って過ごした人もいました。ただ、給水、炊き出し、物資の支給の拠点はマナビイハウスでしたから、自然に人が集まり、情報交換をする場になりました。

——発災直後、大変だったことは何でしょうか？

松田 地震から2日ほどは電話もつながらず、とにかく情報が入りませんでした。ラジオから流れてくるのは札幌や東京発のニュース。ですから、肝心の地元の情報がわからない。町の防災行政無線から給水や

食事の配給情報が次々と流れてきましたが、電気や水道の状況をはじめ、交通や食事の配給も先行きが見えず、みんな不安がっていました。

山路 2日経ったあたりから、テレビで地元の情報が報じられたりするようになり、これらの情報や防災行政無線で放送される情報などをまとめる必要性を感じました。そこで私は、マナビイハウス前に情報を書いたホワイトボードを掲示したり、手書きで新聞を作り、住民の皆さんに配布したんです。毎日、A4用紙1枚に給水車が来る時間、自衛隊が用意してくれた風呂の情報、ごみの捨て方など、あらゆる情報を盛り込みました。手書き新聞の発



避難所となった豊丘マナビイハウス



行は、水道が復旧して、自衛隊の給水車が引き上げる9月28日まで続けました。今振り返ると、この手書きの新聞は「いつ、何が、どうなっていたのか」を刻々と記録した資料となっています。

### ――物資や食糧の状況はいかがでしたか？

**山路** 幸いにも農家が多いので、米や野菜が不足することはありませんでした。それに、マナビイハウスでは発災直後も数日間、水が出たのです。給水車が来る前に住民の皆さんに水を配給できたのは、大きかったと思います。豊丘地区に住む飲食店や商店が、冷蔵庫の電源が切れたために長期保存ができなくなった食糧を炊き出し用に提供してくれたのも、ありがたかったです。

**松田** 炊き出しでは、みそ汁におかずなど、普通の食事が提供されました。皆さん、やはり食べに来ていましたね。

### ――地域の主要産業である農業への被害はいかがでしたか？

**松田** 不幸中の幸いですが、地震の時は水田からちようど水を抜いたタイミングで、

電気や水が必要な時期ではありませんでした。また、収穫後の真冬でもなく、稲をサイロで管理する時期ともずれていたため、豊丘地区ではその年のお米は無事に収穫し、出荷することができました。震災直後に田んぼに応急処置を施したため、翌年の作付けにも影響は少なかったです。

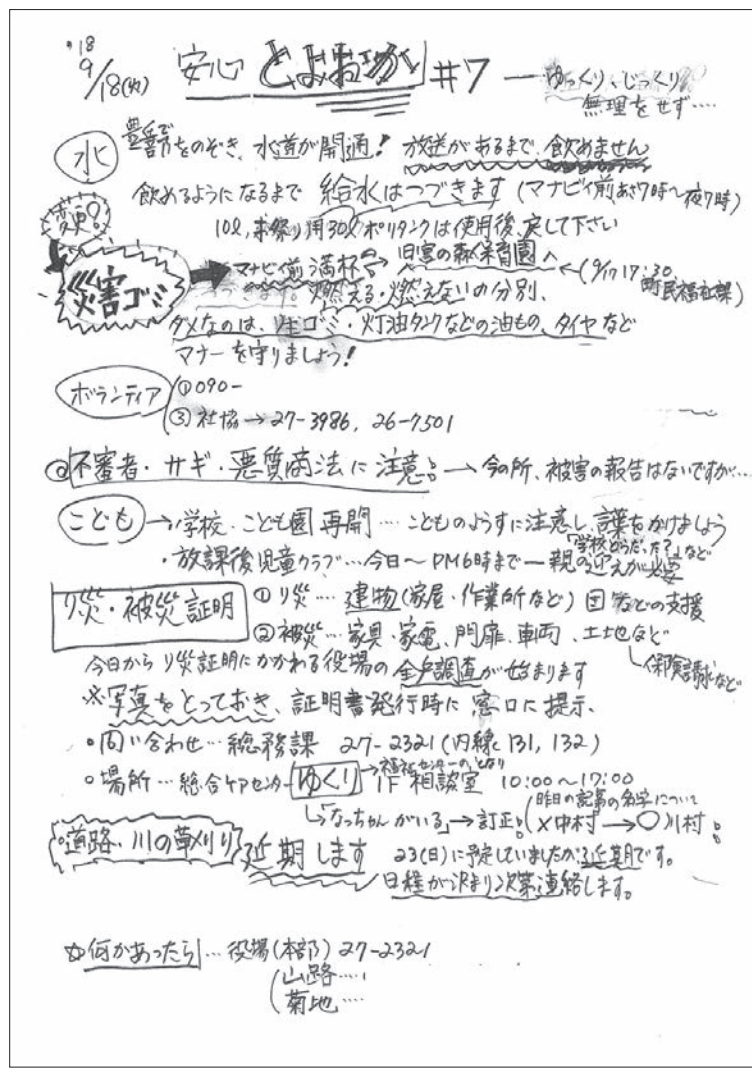
### ――ふだんの自治会活動が役に立ち、震災への対応がスムーズに運んだようですね。

**山路** その通りです。豊丘地区では、毎年9月3日が秋祭りです。前夜の宵宮は、屋台を出したりカラオケ大会をしたりと、かなり大がかりなイベントです。90人しかない自治会なのに、宵宮には400人近くが集まります。炊き出しや物資の配布では、祭りを毎年運営してきた経験が生きました。防災講座で「地域のお祭りをがっちりできる地域は災害に強い」と耳にしていたのですが、その通りだと実感しました。

**松田** 大事なのは、自分たち、仲間同士でどう助け合っていくかだと思うんです。日頃から地域の仲間の顔が見える関係だったので、今回の震災では安否確認や高齢者へ

を持ち、備えをしておく必要があります。また、災害時に住民へ正確な情報を伝達する仕組みづくりが、今後の課題だと思います。噂や臆測はパニックを招きます。大まかでいいので、精査された情報を伝え、住民に落ち着きを取り戻してもらう働きかけが災害時には必要ですね。

**山路** 災害の記憶を風化させないことが大切です。震災から2年半が経ち、この地域も落ち着きを取り戻しつつありますが、当時のことを改めて掘り起こし、まとめていく作業はこれからだと思います。また、犠牲になられた方々の家族や先の見通しが立たない高齢者など、災害後も長



山路さんが支援情報等を手書きでまとめた新聞



豊丘マナビイハウスの前で待機する自衛隊の給水車

の食事の配給など、様々な場面でスムーズに進めることができたのだと思います。

### ――この地域ならではの緊密なつながりが役に立ったということですね？

**山路** 豊丘地区では、祭り以外にも様々な共同作業を日常的に行っています。マナビイハウスの整備や道路や川の草刈りなども、住民が協力してやっています。決して防災や訓練のために行っているわけではありませんが、ふだんから作業を共にしていることで、いざという時に力を発揮できました。不安な気持ちにならずに、みんなと一緒に立ち向かえた。これが私の思う「田舎の良さ」ですね。住民同士が日常的に横のつながりを大事にしているから、何かあった時には強いのです。

### ――震災を経て、次の世代に残したい教訓があればお願いします。

**松田** 災害発生から最初の24時間、48時間をどう乗り越えるかという点が大変重要だと感じました。救援が来るまでの間は、自分たちで乗り切らなくてはなりません。災害はいつでも起こりうると、日頃から意識

期にわたって問題が解決していない人々があります。そのような人たちのことを忘れずにケアをしていかなければならない、地域で支えていかなければならない。次の世代の人たちには、この点をぜひ理解していただきたいです。